

## 過去への旅

浅田雅明

...when I returned to Darlington Hall tomorrow—Mr Farraday will not himself be back for a further week—I will begin practicing with renewed effort. I should hope, then, that by the time of my employ's return, I shall be in a position to pleasantly surprise him.<sup>(1)</sup>

明日ダーリントン・ホールに戻りましたら、ファラデイ様はもう1週間はお帰りにならないでしょうから、気持ちを新たにしてジョークの練習を始めることに致しましょう。そうすればご主人様がお帰りになる頃までには、私はびっくりして喜んでいただけるようになっているかもしれません。<sup>(2)</sup>

これは作品の最後の部分からの引用だが、旅の終わりに老執事スティーブンス(Stevens)が決意したことは、現在の主人であるアメリカ人ファラデイ(Farraday)が好むジョーク(bantering)の技術を上達させようということであった。ファラデイが5週間ばかりのアメリカ滞在からダーリントン・ホール(Darlington Hall)に戻ってくるまでの残り期間の、僅か1週間ばかりで習得可能な技術であるかどうかはかなり疑わしいのだが、とにかく旅の終わりで老執事スティーブンスはこうした決心をする。作品中では『冗談の言い合いなど、とても私が熱意をもって遂行できる任務とは思えません(But I must say this business of bantering is not a duty I feel I can ever discharge with enthusiasm. p.16)』と語っていることを振り返ればこの決意は一見大きな心境の変化と思われるかもしれない。

『日の名残り』( *The Remains of the Day* ) はカズオ・イシグロ( Kazuo

Ishiguro) の長篇小説第3作で1989年5月に刊行され、同年に英語圏最高の賞とされるブッカー賞を受賞したことでカズオ・イシグロを一躍有名にした作品である。長篇第1作『遠い山なみの光』( *A Pale View of Hills*, 1982 ) と第2作『浮世の画家』( *An Artists of the Floating world*, 1986 ) はそれぞれ1950年代初頭の長崎の回想や1948年から1950年に至る日本のとある都市が舞台として描かれており、イシグロの出自からしてイギリスをはじめとする欧米の読者にとっては当然のことながら、外国文学、異文化、異国情緒のイメージが先行した<sup>3)</sup>。しかし『日の名残り』の雰囲気はそれまでの作品とは全く異なり、舞台はイギリスのカントリー・ハウスで主人公は執事ということだから、まさにこれらは古き良きイギリスのステレオタイプなのである。

2017年のノーベル文学賞作家である「日系イギリス人」イシグロは、いや2018年6月にナイトの称号を与えられているのでサー・カズオ・イシグロと記載すべきだろうが、父親の石黒鎮雄が国立海洋研究所( National Oceanography Centre ) 所長ジョージ・デーコン( George Deacon ) に招かれた関係で、1960年に一家でイギリスに渡ることになった。当時5歳のイシグロは短期間で帰国するものと感じていたようだが、その後帰国することはなくイギリスで教育を受け1983年にイギリスに帰化している。長崎時代には幼稚園に通っていたものの、教育歴と言えるものは全てイギリスの教育制度に於けるものであり、使用言語も英語である。従ってイシグロにとって日本における記憶は幼少期の僅かな年月のものであるから、ほとんど残っていないか、或はぼんやりとした記憶の中にしか存在していないのも当然のことであろう。こうした事情では「日系」という肩書は、ただ両親が日本人であるということだけで、イシグロ本人にとっては釈然としないのも当然のことである。一家で海外に移住した場合一般的に親と比べて子供のほうが遥かに現地の言語習得が早いので、幼年期からイギリスで教育を受けたイシグロは家族との会話、意思疎通は必ずしも完璧ではなかったであろう。また、イシグロが渡英したころはイギリス在住の日本人の数は現在と比べて遥かに少なかったので、教育現場において外見が日本人のイシグロがどのように見られていたのかも容易に想像がつく。また『ガーディアン』のインタビューでは

「言語学的にはイギリス人と同じくらいの堅固な英語の基盤を持っていない」と自らの非イギリス性を認めているが、それでも思考の言語は英語であり、日本文化とは隔絶しているイシグロが自らのアイデンティティを見つめた時に、それは幼い頃のぼんやりとした記憶の中に回帰していかなくてはならない。これがイギリス在住の長崎出身の女性の回想を描いた最初の長篇小説『遠い山なみの光』へとになっていく。

『日の名残り』では前2作のイメージを払拭するかのように貴族の館の執事に焦点を当て典型的なイギリスを描いているのだが、記憶の世界を辿っていくという手法は前作と同じである。作品中では実際の旅の時間進行とは逆に、記憶のなかの過去に遡っていく。語り手の老執事がコーンウォールへの旅に出た僅か6日間の出来事が執事の過去への回想と同時に語られていくのだ。過去を振り返り自分の生き方を再確認したあと、旅の終わりに老執事が得た決意の背景に描かれているものは何であろうか。果たしてそこに新たな生きがい、アイデンティティを見出した新しい旅の始まりという結末なのだろうか。老執事の曖昧な記憶への回帰の旅を辿りながら、その決心の奥に描かれているものを検証していこうというのが拙論の意図である。

作品は1956年7月かつて貴族が所有していた屋敷ダーリントン・ホールで始まるが、現在の所有者アメリカ人のファラディに仕える老執事スティーブンスが語り手となり、イギリス西部へと旅をしながら華やかだった過去の屋敷の様子と自らの執事としての過去を回顧するというものである。執事といえばイギリスのカントリーハウスには付き物の存在で、ウッドハウス(P.G.Wodehouse)のジープス(Jeeves)が有名であるが<sup>(4)</sup>、執事は古き良き時代のイギリスを象徴する存在である。かつて中世の貴族の屋敷では様々な役割を担当する100~200人の使用人がいたが、産業革命を経て誕生した新興富裕階層がカントリー・ハウスの主人の仲間入りをすることにより、1891年の国勢調査では総人口2900万人のうち屋内女性家事使用人はおよそ139万6千人、屋内男性家事使用人は女性使用人の2/4分の1のおよそ5万8千人までになっていた。20世紀になると第1次大戦で使用人の数は激減するが、戦後の

不況により他の職に就けない者が一時的に使用人の職に就いたため、1931年の調査では女性使用人がおよそ133万人、男性使用人が7万8千人と人数は戻ったが、第2次大戦後にはアッパー・ミドルクラスを体現するものとして家事使用人を雇うという伝統、風潮は遂に衰退していった。家令、執事、従者 (valet) といった男性家事使用人はいわば贅沢品であって、もはや貴族、地主、大富豪でなければ維持できないものであった。事実、作品の舞台となるダーリントン・ホールでも所有者のイギリス人貴族ダーリントン卿は既に亡くなり、屋敷の現在の所有者はアメリカ人に替わっており、以前のような華やかな社交的行事も少なくなり、17人いた使用人も僅か4名と小規模になっている。

中世の貴族の屋敷には多数の使用人がいて、そのヒエラルキーの頂点にいたのが「家令」(Steward) であり、屋敷内の仕事だけでなく領地全体の運営も任されていたため階級は紳士の出身であり、騎士であることさえあった。従って料理、皿洗い、洗濯などの実際的な労働を担当したヨーマン以下の身分の者たちとは一線を画しており、主人一家と直接顔を合わせ触れ合う立場であったが、17世紀には身分のある者が貴族の屋敷に仕える慣習は衰退していき、使用人を取りまとめ、家計を管理し屋敷を運営する「家令」の職は20世紀になると王室や上流貴族の大邸宅にだけ存続するのみとなった。一方バトラー (butler) は「執事」或は「家令」とも訳されることもあるが、元来バトラーの語源はフランス語のbouteillierで、「酒のお酌係」(cup bearer) という意味で、食品や食器を管理する労働者階級に属する中間管理職であった。中世ではワイン、ビールなどの飲料保管長は「バトラー」、パンや食器などの食品管理長は「パンター」と呼ばれており、17世紀頃にはこうした二つの職はその他の職種をも含めて「執事」(バトラー) と呼ばれるようになり、19世紀から20世紀にかけてはワイン貯蔵庫や銀器の管理などの本来の職務を受け継ぎながら、給仕や接客を始めとして人事や管理などにも職務領域を広げていき、屋敷内で重要な地位を占めるようになっていった。

雇主である貴族や地主、大富豪の側近に執事として仕えたと、時間のほとんど全てを雇主に捧げ、執事の存在は彼らの生活の一部として取り込まれて



いくことになるのだが、執事はまた、厳しい上下関係がある使用人の世界の頂点にあり、執事の職は労働者階級にとっては最高の地位であったので、執事に課せられるこうした制約をも受容していた。20世紀初頭に執事を経験したアーネスト・キングは「理想の執事とは家庭生活を持たないものだ。妻を持つことさえ許されない。たとえ結婚したにしても妻は存在しないもの、目に見えないものとして扱わなくてはならなかった」と執事の厳しい家庭生活についての見解を述べている。事実、既婚の執事は家族のために雇い主の財産に手を付ける危険があるということで、既婚の執事を嫌がる雇い主もいた。こうした実情はミス・ケントン(Miss Kenton)の心情に対するステーブンスの冷淡な態度を理解する際に参考となろう。典型的な執事像としては、個人的な感情はいっさい表に出さず、余計なことは語らず、仕事にも有能で、主人に忠実に仕え常に影の存在として振る舞い自己主張はしないというものであった。更に、使用人のヒエラルキーの頂点に立つ執事は使用人たちの厳格な父親の役割も果たさなくてはならなかったのだ。勿論、執事の職は経験なしに得られるものではなく、労働者階級や下層中流階級出身の者が厳しい訓練と経験を重ねて技術を体得し、ヒエラルキーを徐々に上っていき、最終的には礼儀作法、服装、ワインなど様々な知識において主人と同等、あるいはそれ以上の見識を持つに至るのだ。そして執事にとって雇い主の社会的地位とは即ち自分たちの価値を体現するものであったことは忘れてはならない。こうした執事像の認識は、この作品に於いて老執事の過去への回帰の旅を検証するうえで重要な手掛かりとなる。

作品の現在時は1956年7月から始まるが、1956年と言えばイギリスにとっては重要な年であった。同年7月26日に、イギリスとフランスが分割して所有していたスエズ運河を、エジプトの当時の大統領ナセルが国有化宣言したことに端を発し、エジプトへの経済制裁に続いてイギリス・フランス軍が軍事介入をし、スエズ紛争が勃発した年である。しかしこの強硬策に対しては国連緊急総会で即時停戦の要求が議決され、その結果イギリスはスエズ運河会社の喪失を始めとしてエジプトに所有していたそのほかの資産も国有化されて失い、結果、イギリス首相エイボン伯アンソニー・イーデン(Anthony

Eden, Earl of Avon) は失脚することになった。この事件はイギリスの歴史に於いて「大英帝国」の威信・威光と古い秩序が遂に崩壊したといえる重大な意味を示しているのだが、『日の名残り』のストーリーはまさにこの年に始まっている<sup>6)</sup>。そしてイギリスの凋落を示すかのように、老執事が働く古き良き時代のイギリスを象徴する広大なカントリーハウス、ダーリントン・ホールは200年にわたって所有したイギリス人貴族からアメリカ人富豪の所有へと代わり、20~30人ほどいた使用人も執事を含めて僅か4人となっているのだ。作品では老執事スティーブンスがエピソードから始めて時系列で第1日目から第6日目までの数日の旅を物語るのだが、実は彼の話の大部分を占めているのは時間を逆行して1920年、1930年代へと遡った以前の雇主ファラディの時代の出来事である。老執事スティーブンスの目をとおして語られることであり、また記憶という曖昧な領域を手繰り寄せての話であるので、「信頼のおけない語り手」<sup>6)</sup>と指摘されるように、整合性がなく不自然で、自己欺瞞とも受け取れるような描写も散見できるのだが、この1人称の語り手の感情の起伏はスティーブンスの心情の理解を容易にしてくれるというメリットがある。まずは時系列に沿って老執事の記憶の中に彼の意識・考え方、言い分を辿っていこう。

#### PROLOGUE: JULY 1956 *Darlington Hall*

(プロローグ：1956年 ダーリントン・ホール)

ダーリントン・ホールの現在の所有者で雇主のアメリカ人ファラディからの提案で、自分がアメリカに帰って不在の間にどこかにドライブ旅行に出かけて美しい場所を見たらどうかという話題で物語は始まる。この提案に対して老執事は、「私どものいる場所こそ、イギリスで最も重きをなす紳士淑女のお集まりになる場所なのです(we were in houses where the greatest ladies and gentlemen of the land gathered. p.6)」と、自分が今いる屋敷がイギリスで最高の場所だとして、話を真剣には受け止めない。この冒頭の場面に於いてアメリカ人ファラディと伝統的なイギリスを体現する老執事との認識の相違が明確にされている。その後「職務上の観点(professional matters)」に

より老執事の気持ちは一変してイギリス西部地方への旅を決心することになるが、その職務上の観点とは、一人前の執事の証明である完璧な「職務計画(staff plan)」に使用人不足による不備があり、その不備を解決し職務計画を再び完璧に戻してくれる人物として、ダーリントン・ホールで女性使用人を統括するハウス・キーパーとして働き、20年前に職を辞しコーンウォールに去ったミス・ケントンの存在しか考えられないということである。老執事の心を翻させたミス・ケントンからの手紙については次のように語られている。

Having made such an analysis of the situation, it was not long before I found myself reconsidering Mr Farraday's kind suggestion of some days ago.

For it had occurred to me that the proposed trip in the car could be put to good professional use; that is to say, I could drive to the West Country and call Miss Kenton in passing, thus exploring at first hand the substance of her wish to return to employment here at Darlington Hall. (pp.10-11) (下線部筆者)

つまり、ミス・ケントンに会いに行くのは職務計画の不備を直すという純粹に職務上の観点からで、それは同時にお屋敷のためであるということが強調されているのだが、一方で老執事の決心の後押しをしたのはミス・ケントンからの手紙であり、そこに彼女のダーリントン・ホールへの郷愁と戻りたいという願望を感じ取り、「何度読み返してもミス・ケントンの願いが私の空想の産物だとはとても思えないのですが。(I have, I should make clear, reread Miss Kenton's recent letter several times, and there is no possibility I am merely imagining the presence of these hints on her part.p.11)」と、心情を少しばかり吐露している。

「プロローグ」の章ではもうひとつ「ジョーク、冷やかし(bantering)」について指摘しておかなければならない。老執事が意を決して主人ファラディ

に旅行の申し出とその理由を述べた時、「おいおい、ステイーブンス。ガールフレンドに会いに行きたい？その年でかい？(My, my, Stevens. A lady-friend. At your age. p.14)」と冷やかしのジョークを受ける。ダーリントン卿であったなら絶対に使用人にこうした気まずい気分を持たせることはなかっただろうと老執事は居心地の悪い一瞬を過ごす、「ファラディ様はアメリカ的ジョークを楽しんでおられ、アメリカではその種のジョークが良好な主従関係のしるしで、親愛の情の表現だとも聞いております。(he was, I am sure, merely enjoying the sort of bantering which in the United States, no doubt, is a sign of a good, friendly understanding between employer and employee, indulged in as a kind of affectionate sport. p.14)」と自らに言い聞かす。ファラディが冗談に絡めた指摘は全く的外れのものでなかったことは作品の最後の場面で分かるのだが、この場面で老執事は主人のジョークへの対応について次のように語る。

It is quite possible, then, that my employer fully expects me to respond to his bantering in a like manner, and considers my failure to do so a form of negligence. This is, as I say, a matter which has given me much concern. But I must say this business of bantering is not a duty I feel I can ever discharge with enthusiasm. (p.16)

(下線部筆者)

主人の意向に沿うように振る舞うことが執事としての職務であるならば、当然のことながら、ファラディのジョークにもうまく応えなくてはならない。しかし老執事にはこうした職務は熱意を持って遂行できる任務ではないと思え、その技術を習得するのは困難であると自らの限界を感じている。

## DAY ONE - *Salisbury*

(1日目一夜 ソールズベリーにて)

ソールズベリーの中心からさほど遠くない宿で老執事は旅の初日を振り

返り、イギリスの田園風景が最も素晴らしい姿を見せる時には、外国の風景がどんなにドラマティックでも決して持ちえない「品質(quality)」を持つとし、それは「偉大さ(greatness)」という言葉が最適だと語る。そしてその「偉大さ」とは美しさのもつ「落ち着き(calmness)」であり「慎ましさ(restraint)」であるという考えは「偉大な執事とは何か?(What is a 'great' butler?)」という執事としての根幹を形成する認識へと導かれていく。老執事は超一流の執事しか入会資格がないと言われていたヘイズ協会(Hayes Society)の見解を借用して、偉大な執事と単なる有能な執事との違いは、自らの地位に相応しい「品格(dignity)」が具わっているかどうかであると断言する。そしてこの見解はさらに「品格」とは何かという次の問いに繋がり、老執事は品格の定義について自分の考えを説明するのだが、その根幹を形成するのは執事として円熟期にあった頃の父親の姿である。父親は一世代前の執事であって、ステューブンスの世代のような職業的価値の混乱を免れた世代の執事であったが、屋敷の運営について何一つ知らないことはなく、まさに「自らの地位に相応しい品格」の体現者であったことを、父の執事時代のエピソードを交えて物語る。ここで老執事が語る品格とは、生涯をかけて追及しても決して無意味ではなく、長年にわたる自己啓発と経験の積み重ねで身につけていく至高のものという考えだが、第1日目の夜は偉大な執事と「品格」の関係について次のような見解を述べて終わる。

And let me now point this: 'dignity' has to do crucially with a butler's ability not to abandon the professional being he inhabits.... The great butlers are great by virtue of their ability to inhabit heir professional role and inhabit it to the utmost; they will not be shaken out by external events, however surprising, alarming or vexing....It is, as I say, a matter of 'dignity'. (pp.39-40)

偉大な執事とは自らの職業の在り方を貫き、最後までそこに踏みとどまり、どれほど意外で恐ろしく、腹立たしい外部の出来事に対しても動じず、耐える能力を保持していなくてはならない。それはまさに「品格」の問題である

のだが、「品格」を具えた偉大な執事は感情の抑制がきくイギリス民族にしか望めないとも断言する。スティーブンスにとって「品格」を身につけるよう努力を重ねることは執事としての職業的責務であり、執事として目指す到達点なのである。第1日目は「品格」というキーワードを用いてスティーブンスが抱く偉大な執事像が明らかにされている。

## DAY TWO – MORNING *Salisbury*

(2日目一朝 ソールズベリーにて)

2日目の早朝老執事の意識はミス・ケントンからの手紙へと戻っていく。手紙のどこにもダーリントン・ホールに戻りたいと明確に書かれていないことを認めつつも、ミス・ケントン（現在はミセス・ベン）の結婚生活は破綻しかけていて、ダーリントン・ホールへの深い郷愁が文章の随所に感じられ、手紙から伝わるメッセージは間違いようがないと老執事は確信している。作品の冒頭ではミス・ケントンに会うのは純粹に職務上の観点からであったと老執事は語っているが、次の言葉に老執事的心情を垣間見ることができる。

At this very moment, no doubt, she is pondering with regret decisions made in the far-off past that have now left her, deep in middle age, so alone and desolate.(p.46)

(下線部筆者)

中年も相当な年齢になったミス・ケントン（ミセス・ベン）が孤独で侘しい思いをしているなら、それは遠い過去の彼女の選択に原因があると老執事は語る。「遠い過去の選択」とは表面上では、20年前にミス・ケントンがダーリントン・ホールを去る決心をしたことであるが、その背景にはスティーブンスへの想いが存在していたということが旅を続ける老執事の語りのなかで徐々に明らかになっていく。読み返してみるとこの言葉の中にスティーブンスが執事としての職業意識により抑圧していた感情の起伏が読み取れるのだが、この時点の語りでは依然として、ダーリントン・ホールが抱えている問

題に完璧な解決策をもたらすためにミス・ケントンに会いに行くのだというのが老執事の言い分なのだ。

ここで、ミス・ケントンとの思い出を記憶の中に辿りながら時は逆行して1920年代へと遡っていく。ここで語られるのは執事人生の転機となったと自負する、ダーリントン・ホールで開催された国際会議でのスティーブンスの貢献とダーリントン・ホールに当時副執事として雇われていた、かつては理想の執事で今は年老いた父親の姿との交錯である。ミス・ケントンと父親は共に1922年春にダーリントン・ホールに職を得たのだが、その理由は働いていたハウス・キーパーと副執事が結婚して退職したその補充ということであった。ここで老執事は使用人どうしの結婚は屋敷の秩序にとって大きな脅威であるという持論を展開するのだが、特に「指導的立場にある使用人の間でそのようなことが起こると、お屋敷の運営に重大な影響を及ぼしかねません。(…such marrying amongst more senior employees can have an extremely disruptive effect on works. p.48)」という老執事の言葉は、ハウス・キーパーであったミス・ケントンとの私的感情の立ち位置をスティーブンスが執事としてどのように捉えていたかを理解する手掛かりとなる。また、副執事としての父親の衰えは何度かミス・ケントンに指摘されるが、理想の執事像を父親に求めるスティーブンスは現実に気づきながらもそれを直視できない。屋敷で開催される重要な国際会議を成功させるため、ちょっとした失敗が会議に影響を及ぼすような任務には就かせられないという主人ダーリントン卿から指摘を受けとことにより初めて父親に対する客観的な判断が下せるのだ。これは現実を直視しようとしないうスティーブンスの性格の一面を示唆するものであるが、一方で、今やこの時の父親の年齢に近づいた老執事自身の、執事としての衰えを認めたくないという心理が当時のスティーブンスの判断に対する評価の甘さとして表れている。

ダーリントン・ホールではいくつもの重要な会議が開催されたが、1923年3月の会議はダーリントン・ホールで最初に開催された会議であり、それはダーリントン卿の長期にわたる努力が結実したもので、ベルサイユ条約に定める敗戦国ドイツへの過酷な条項をどのように改定すべきかを話し合うため



に国内外から多くの重要人物を招いたものであった。会議が開催される3日間とその準備期間にステューブンスは有能な執事として奮闘するが、彼を支えていたのは「歴史がこの屋根の下で作られるかもしれない(History could well be made under this roof. p.71)」という言葉に象徴されるように、世界を動かす重要な会議を支えているという自負心である。この経験で「品格」という重要な特質を身につけたと以下のように老執事は自らの成長を語っている。

But should it be that anyone ever wished to posit that I have attained at least a little of that crucial quality of 'dignity' in the course of my career, such a person may wish to be directed towards that conference of March 1923 as representing the moment when I demonstrated I might have a capacity for such a quality. (p.65)

(下線部筆者)

老執事は過去の会議の成功を振り返り、それが執事人生の転機であり、執事として真に「成人した」時と認識するが、そこには会議のさなかに倒れた父の姿も重なっている。会議が始まった日に倒れた父親は会議中に開催された最後の晩餐会の途中、2日目の夜に症状が悪化し亡くなるのだが、その間ステューブンスはほんの僅かしか父に会いに行かず、亡くなったこともミス・ケントンから知らされるのである。それでも「父もいまは私に職務を果してもらいたいと望んでいるはずです(I know my father would have wished me to carry on just now. p.95)」と述べて執事としての仕事に戻っていく。ステューブンスにとっては、国際的な役割を果たすという重大な主人の使命をサポートすること、即ちそれは執事としての価値を高めてくれることでもあり、私事を後回しにしても最優先で果たすべき価値のある職務でもあったのだ。雇主の崇高な責務を成就させるためには、私情など投げ捨て全てを職務に捧げるといふ執事としての姿勢を肯定し、そこに自らの存在意義を見出しているのだ。

DAY TWO – AFTERNOON *Mortimer's Pond, Dorset*

(2日目一午後 ドーセット州モーティマーズ・ポンドにて)

2日目の午後は再び「偉大な」執事とは何か？についての老執事の考えが語られる。きっかけは故障したフォードの修理のために立ち寄った村の男の問いかけである。老執事はダーリントン・ホールに雇われている執事であることは認めるが、アメリカ人のファラディに雇われているのであってダーリントン卿に雇われていたことはないように振る舞ってしまうのだ。ところがダーリントン卿との関係を認めないこうした振る舞いはこの時だけではなく、ファラディが屋敷に招待したアメリカ人ウエークフィールド夫妻からダーリントン卿のもとで働いていたかと尋ねられた際にも否定したことを認めている。その理由として老執事は、ダーリントン卿についてのでたらめ、愚かしい中傷をこれ以上聞きたくないという思いからだと弁明するが、説得力はあまりない。ダーリントン卿の醜聞についてはこのあと徐々に明らかにされるのだが、「偉大な執事とは何か」についての理想像とこうした弁明に見られる曖昧さは、スティーブンスが目指していた世界と痛ましい現実との相違を浮き彫りにしていくことになる。

老執事の認識は昔から一貫しており、偉大な執事の第一条件とは名家に雇われていることである。そして名家であるかどうかは雇主の徳の高さによって判断されるが、こうした雇主は人類の進歩に寄与している紳士なのである。世界で最も重要な事柄は全てイギリスの大きなお屋敷の密室の静けさの中で決まるという確信に満ちた見解が語られ、どんなに執事としての特質を身につけていても、それを発揮する適切な場が与えられなければ執事としての偉大さを認められることはないとする。従って執事としての職業的威信は雇主の人間的な価値の大きさに比例して決定されるとの認識なのである。

...association with a truly distinguished household is a prerequisite of 'greatness'. A 'great' butler can only be, surely, one who can point to his years of service and say that he applied his talents to serving a great gentleman—and through the latter, to serving humanity. (p.104)

(下線部筆者)

幾分大袈裟な言い分なのだが、偉大な紳士に仕えることにより人類に奉仕したと断言できる執事こそ、真に「偉大な」執事であるとの認識である。ダーリントン卿に仕えた35年の歳月では世界を動かす車輪の中心に近づけたのだと大きな満足感を抱いているのだが、その認識を支える重要な要素として、ダーリントン卿は高德の紳士でなくてはならない。それを否定することは即ち執事としての自らの存在意義を失うことにつながるのだ。だがダーリントン卿のもとで働いたことがないと嘘をついたことに関する老執事の弁明からは、こうした確信への揺らぎが徐々に垣間見えてくる。

### DAY THREE - MORNING *Townton, Somerset*

(3日目一朝 サマセット州トントンにて)

ここではファラディが好むジョークへの対応、ダーリントン卿の評価、ミス・ケントンからの手紙に感じた郷愁についての老執事の不安と心の揺れが語られる。2日目の夜に宿泊した宿の階下のバーで近在の農夫たちに冗談が通じなかったエピソードから、ファラディの屋敷で老執事が最近努力を重ねているジョークの技術についての見解が続いていく。雇主ファラディからのいかなるジョークに対しても、それに応えて雇主を喜ばすことは執事の責務であるから、自信をもって受け答えできるようかなりの時間を割いて努力を続けてきたことを老執事は語る。しかし昨夜村人に発したジョークの失敗で落胆したため、豊富な経験を積み重ね必要な技術を会得するまでは、ファラディに対してジョークで応えるという職務の遂行は差し控えるのが賢明だと心に決める。

老執事は市場町トントンの大通りに面した店で朝のお茶を飲みながら、大通りの向こうの案内板に記載された「マースデン」という地名から銀器の磨き粉として他に追従を許さないほど優れた黒蠟燭に思いを馳せる。銀器磨きは執事の重要な職務のひとつであるのだが、ダーリントン・ホールの銀器が客人に良い印象を与えた事例が多数あるという自慢話が語られる。しかし

閣僚のハリファックス卿と駐英ドイツ大使リップントロップ(Ribbentrop)との会談に銀器の磨き具合が小さいながら無視できない貢献をしたというエピソードの披露に至っては、執事としての有能さの証明というよりはいささか滑稽さが感じられる。

次にリップントロップに関連して、旅の2日目に少しばかり触れていたダーリントン卿の戦後の評判についての本格的な弁護が表明されるのだが、それにはリップントロップについてここで簡単な説明を加えておいたほうがいいであろう。リップントロップはドイツ貴族であり外交官の経験もあったが1932年にナチ党に入党し、1933年にヒトラーが首相に指名されるとヒトラーお気に入りの外交アドバイザーとなり、1936年8月には駐英大使に任命された。従ってハリファックス卿とのダーリントン・ホールでの会談もこの頃のことであるのだが、リップントロップはイギリス上流階級の人々にヒトラーを訪問させることに成功し、そのなかには首相経験のあるデビッド・ロイド・ジョージもいた。彼の使命はドイツ・イギリスの連携を果たすことであったが、実際にヒトラーに面会したイギリス人は実業家、貴族、引退した政治家などで、当時の政治の中枢にいた人物は少なかったため、結局は使命を果たすことができなかった。その後ヒトラー内閣の外務大臣、親衛隊名誉大将と歴任し、戦後のニュルンベルク裁判により処刑された。老執事はダーリントン卿が何度かドイツに赴き、ナチの歓迎を受けたことを認めながらも、リップントロップを名誉ある紳士と信じて協力したのはダーリントン卿だけではなく、イギリスで最も古いお屋敷の、最も尊敬されていた紳士淑女たちも同様にドイツ指導者たちの歓待を喜んで受けていたと卿を擁護する。作品中では具体的には触れられていないが、事実多くのイギリス人貴族がドイツに利用された。1936年といえばイギリス国王エドワード8世がアメリカ人女性シンプソン夫人との結婚を望み、国王の座を放棄した年でもある。その後イギリスを離れた夫妻はパリ郊外に暮らしたが、ヒトラーの招待で実際にドイツを訪問し、ヒトラーがイギリスを降伏させた後は傀儡政権下の国王にエドワード8世を就任させる計画があったといわれている。老執事はさらに続けて、ダーリントン卿は反ユダヤ主義者でもなく英国ファシスト連合と密接

な繋がりがあるといふ噂は全くのでたらめであつて、物事の真の中心で活躍した高德の人物であると以下のように強調する。

...one has had the privilege of practicing one's profession at the very fulcrum of great affairs. And one has right to feel a satisfaction those content to serve mediocre employers will never know—the satisfaction of being able to say with some reason that one's efforts, in however modest a way, comprise a contribution to the course of history. (p.123)

(下線部筆者)

偉大な雇主に仕えることにより国家の大事の真ただ中で執事を務める「特権」を与えられ、歴史の流れに僅かながら貢献できたことに老執事は満足しているのだが、それには雇主ダーリントン卿が広く人々に尊敬される偉大な人物、ノブリスオブリージュを体現する人物であることが前提条件である。老執事はダーリントン卿を擁護するのだが、一方で30年代のごく短い一時期に周囲に誤解を招くようなことがあつたかもしれないという言葉には、一抹の不安を隠しきれないことが示唆されている。そしてこの不安の連鎖はミス・ケントンの手紙の解釈にも繋がっているようだ。ミス・ケントンがダーリントン・ホールに戻りたがっているのではないかという当初の確信めいた期待も、手紙を読み直してみると文面のどこを探しても昔の職に戻りたいという意味は具体的に書かれていないことに気づき、薄れてくる。だがこの場面でも、「もしかしたら、私が一執事としての希望的観測から、ミス・ケントンがそのように望んでいると勝手に解釈しているだけなのかもしれません。(one has to accept the distinct possibility that one may have previously—perhaps through wishful thinking of a professional kind—exaggerated what evidence there was regarding such a desire on her part. p.124)」と、ミス・ケントンの真意の解釈に疑問を覚えながらも、依然としてミス・ケントンの復帰を望むのは私的な理由ではなく「一執事としての」希望的観測との態度を崩さないことに留意しておく必要があるだろう。

DAY THREE – EVENING *Moscombe, near Tavistock, Devon*

(3日目一夜 デボン州タビストック近くのモスクムにて)

戦後のダーリントン卿の評判は芳しくないという情報は既に語られ、老執事は世間の評判を愚かしい噂として否定してはいるが、旅先ではダーリントン卿に仕えていた事実を隠すといった曖昧な態度を採っている。ここで老執事の回想はダーリントン卿によるユダヤ人使用人解雇のエピソードへと戻り、当時のダーリントン卿の考え方について詳細に物語られ、同時に使用人の解雇のエピソードはミス・ケントンとスティーブンスの関係の描写へと続いていく。老執事の説明によればダーリントン卿の反ユダヤ主義については、バーネット夫人とその知人で黒シャツ組織のオズワルド・モーズレーとのひと夏の僅かな接触の影響に過ぎないということなのだが、ダーリントン卿がユダヤ人に対する敵意を見せたことは事実であると認めている。それはユダヤ人が多いという理由で地元の慈善団体への寄付を取り止めたこと、屋敷の二人のユダヤ人使用人を解雇したことという事実により補足されているのだが、こうした不適切と思える雇主の行為に対してもスティーブンスは執事として素直に従っている。この件に関して老執事スティーブンスは当時を回想し、ダーリントン卿の決定に若干の違和感を抱いたことは認めつつも、「ご主人様が決定したのだからあれこれと議論することはできない(His lordship has made his decision and there is nothing to debate over. p.132)」とし、「職業上の義務は自分の感情をさらけ出すことではなく、ご主人様の意見に従うことであり(our professional duty is not to our own foibles and sentiment, but to the wishes of our employer p.132)」判断に感情を交えてはいけないと語る。なぜならば「ご主人様のほうが良い判断を下せる立場にいるから(Whereas his lordship is somewhat better placed to judge what is for the best. p.133)」という見解であって、あくまで執事としての職業上の職務(professional duty)を遂行すべきだということなのだ。

ユダヤ人使用人解雇の一件はミス・ケントンのスティーブンスへの反論に続くのだが、この場面でスティーブンスとミス・ケントンとの間柄が詳細に語られることにより、老執事の心に生じる感情の起伏をかなり明確に理解す

ることができる。回想は1933年に遡る。ここで仕事が終わったあとミス・ケントンの部屋で毎夜開催されていた「ココア会議」の存在が語られる。女性の部屋で夜に開催される二人だけの会合といえば特別な意味合いが含まれそうだが、スティーブンスとミス・ケントンは共に忙しい日々を送っていたため情報交換の機会がなく、屋敷の運営に支障をきたしかねないのでその解決策として毎晩職務上の打ち合わせの時間を設けたのであって、ココア会議は全く事務的な性格のものであったと語られている。しかし一方で、ふたりで軽口を言い合う場でもあり、一日の仕事の緊張を解きほぐすのにとっても効果的であったことも認めているように、スティーブンスにとって居心地のいい特別な時間であったことは明らかである。ここでミス・ケントンはスティーブンスに対して感情を率直に表現しているが、彼女の心情はおそらくスティーブンスにも感知できているはずなのに、彼のほうは執事としての体面を崩そうとはせず平穏を装っている。

語り手の老執事は、旅に出る数週間前、ミス・ケントンに再会できるかもしれないと思い始めてから二人の関係を巡る回想が多くなったことを認めている。特に二人の関係が変化を遂げた1935年から36年に思いを馳せ、何が二人の順調な関係に変化をもたらしたのか納得できる説明を探そうと試みて、決定的な転機としてミス・ケントンが執事の食器室(butler's pantry) に勝手に入ってきた夜の事をかなり詳細に物語り始める。屋敷の食器室は伝統的に執事が管理する所であり、執事の許可が失ければ入室できない特別な部屋であった。従ってスティーブンスがその部屋を屋敷の運営の中心となる最も重要な場所と考え、たとえ毎晩ふたりだけのココア会議を開催する間柄のハウス・キーパーでさえも勝手に出入りして欲しくないという考えを抱くことは、執事としての職務を優先する彼の性格を考慮すれば容易に想像できる。ところがミス・ケントンは執事の部屋の雰囲気明るくするためという口実で、花を生けた花瓶を勝手に部屋に持ち込んできたのだ。それも一度ならず、老執事の記憶によれば少なくとも三回はあった。転機となったと思われる夜に、プライベートの時間に読書をしていたスティーブンスの食器室に許可なくミス・ケントンは入室する。プライベートを尊重するようにと窘めら



れてもかまわず進み、さらに、どんな本を読んでいるのかとミス・ケントンは尋ねるが、「自分のために費やせる僅かの時間まで、あなたにこんな風に付きまといられるのは、実にけしからんことです。(It is quite impossible that you should persists in pursuing me like this during the very few moments of spare time I have to myself. p.147)」とステーブンスは突き放す。それでもミス・ケントンはかまわずステーブンスに近づいていき、彼は本を胸に抱いたまま後ずさりする。

‘Please show me the volume you are holding, Mr Stevens.’ Miss Kenton said, continuing her advance, ‘and I will leave you to the pleasures of your reading.

What on earth can it be you are so anxious to hide?’

‘Miss Kenton, whether or not you discover the title of this volume is in itself not of the slightest importance to me. But as a matter of principle, I object to your appearing like this and invading my private moments.’  
 …Then she was standing before me, and suddenly the atmosphere underwent a peculiar change— almost as though the two of us had been suddenly thrust on to some other plane of being altogether... ‘Please, Mr Stevens, let me see your book.’ (p.147) (下線筆者)

ミス・ケントンはステーブンスが隠して見せようとしないう本の内容が何であるのかと尋ね迫っていく。するとその瞬間まるで別の次元に押しやられたかのようにふたりを取り巻く空気が微妙に変化する。「いったい何をそんなに隠していらっしゃるの」「どうか私にあなたのご本を見せてください」と迫るミス・ケントンの言葉は興味深い。彼女が見たいもの、ステーブンスが隠して見せない本が何を示唆しているのかについては指摘するまでもないだろう。しかしステーブンスは断固たる態度で彼女を部屋から引き取らせ、この出来事を冷淡な態度で終わらせてしまう。結局ミス・ケントンには読んでいた本の内容を知られてしまうのだが、ステーブンスが隠していた

本が感傷的な恋愛小説であったこともストーリーの展開上、スティーブンスの心理を示唆するものとして効果的なものである。執事としての言語能力を磨くためにこうした小説を読んでいたとスティーブンスは弁明するのだが、これに関しては、当時は決して認めることはなかったが今では別に恥ずかしいことではなかったと見解の変化を老執事は回顧する。そしてこの出来事でミス・ケントンとの関係が適切とは呼べないものになったことに気付いたという事実も認めている。

もうひとつの転機は、食器室での一件の頃からミス・ケントンの休暇の取り方に変化が生じたことに起因するが、それはココア会議の打ち切りへという結末に導かれていく。彼女は契約に定める全ての休暇を取るようになり、休みの日には朝早くから姿を消すようになってしまう。定期的に彼女宛ての手紙も届くようになり、スティーブンスは彼女の不可解な外出は求愛者に会うためではないかと不安になり始める。そして事の真相を究明しようとするのだが、この局面でも彼女が結婚してダーリントン・ホールを去ることになれば職務遂行上の重大な損失になるという理由をつけ、執事としての義務としてココア会議の席で個人的な事情を問いただすのだ。怒り出すのではと思っていたが、意外なことにミス・ケントンはスティーブンスがその話題を持ち出すのを待ちかねていたかのように幾分ほっとした表情を浮かべる。おそらくスティーブンスが彼女のプライベートな事柄を話題にするのは初めてのことなのだ。だがこれを契機にミス・ケントンが望む方向に話題が進むことはなく、結局、「この世で何をお望みかわかりません(I really cannot imagine what more you might wish for in life. p.152)」という彼女の問いかけに、「ダーリントン卿がすべてを成し遂げたと誰もが認める日、そして卿が栄冠を戴いて休息される日、その日こそ私も自分を満足した人間と認めることができるでしょう(the day he is able to rest on his laurels, content in the knowledge that he has done all anyone could ever reasonably ask of him, only that day, will I be able to call myself a well-contented man. p.152)」と自分の人生はダーリントン卿次第だと答えるだけで、その結果ふたりの会話は弾みとその後の展開を失ってしまう。このあとココア会議でミス・ケント

ンは集中力を欠き、どこか心ここにあらずといった様子が多くなり、それを軽く叱責したスティーブンスの言葉に彼女は突然感情的な言葉で応えてしまう。スティーブンスはこれに対して計算しつくした静かな口調で以下のように告げる。

'If that is how you feel about it, Miss Kenton, there is no need at all for us to continue with these evening meetings. I am sorry that all this time I had no idea of the extent to which they were inconveniencing you.' (p.154)

「あなたがそのように考えているなら夜間の打ち合わせを続ける必要はない。不自由をかけていたことに気づかなくて申し訳ない」と、スティーブンスは冷淡にココア会議開催の中止を言い放ち、打ち合せの会はとても有益だとして彼の決定の撤回を嘆願する彼女の言葉にも耳を貸さない。こうした頑ななスティーブンスの言動は、心に芽生えたミス・ケントンへの個人的な感情の認識と、執事として私情を押し殺して職務に専念すべきだという、相反する心情から生じる苛立ちであることは容易に推測できる。その後何度も打ち合わせ会の再開を示唆してきたミス・ケントンに頑なな態度を採らずに折れていたならふたりの関係はどのようになっていたのだろうか、ココア会議廃止の決定がどのような意味を持つのかがよくわかっていなかったのだと、老執事は後悔する。小さな決定が決定的な転機となり、あとは坂道を転がるように関係が崩れていき、取り返しのつかないものになってしまったとここで明確に認識するのだ。

宿を提供してくれたテイラー夫妻の食堂での村人たちとの老執事の辛い体験談のち、再び記憶は1935年に遡り、ダーリントン卿の主義主張についてさらに詳しく知ることになる。民主主義は過ぎ去った時代のもので、議会政治を続けている限り困難な問題に解決策を見出すことはできない。ドイツやイタリアのように強い指導者に行動の機会を与えなくてはならないというダーリントン卿の言葉が事実であったことが語られている。ドイツとイタリアの

強力な指導者が誰を指すのかは言うまでもないのだが、こうしたダーリントン卿の言葉はこれまでの老執事の弁明にもかかわらず、その後の彼の芳しくない評判が全く根拠のないものではないということを示している。しかし老執事は、国家の大問題とは一執事の理解を超えたところにあり、そのなかで執事の役割とは文明の将来を担う偉大な紳士に全力で奉仕することであり、雇主の行動の評価など行わず、ただ忠誠心を以て仕えることであると執事の立場を弁明する。執事の最善の道とは、賢く高潔であると自らが判断した雇主に全幅の信頼を寄せ、力の限りその雇主に尽くすことなのである。従ってダーリントン卿の努力が壮大な愚行としか評価されなくても、それは執事まで責められるべきものではなく、執事として最善を尽くして任務を遂行したことが重要なのだと主張しているのだ。しかしこの言葉には明らかに矛盾がある。執事としてスティーブンスが目指す重要なものは「品格」であり、その品格は高潔な雇主に仕えることにより育まれるものである。雇主の価値により使用人である執事の価値も決まると語っていたのではないか。執事としての成功と雇主の高潔さは不可分の関係であるならば、ダーリントン卿が賢明で高潔の士であるとした自らの判断の間違いは、執事としての存在意義の失墜ということになる。

#### DAY FOUR - AFTERNOON *Little Compton, Cornwall*

(4日目一午後 コーンウォール州トル・コンプトンにて)

老執事はローズガーデン・ホテルの食堂に座りミセス・ベン（ミス・ケントン）との面会の時間を待っている。窓の外に見える村の広場に降り続く雨を見ながら、老執事自身脳裏にしっかりと刻まれ消えることがないと認識している、ミス・ケントンとのある思い出のシーンに戻っていく。彼の記憶はダーリントン卿の仲介により屋敷で開催された駐英大使リッペントロップとイギリス首相との秘密会談が開催された日に遡る。その日、卿がドイツに利用されて深みにはまっていくのを案じ、ダーリントン・ホールを訪れたデイビッド・カーディナルから、卿が数年の間に60人近くのイギリス人有力者をナチスと接触させる手助けをしたという事実をスティーブンスは知らされ

る。しかしこうした衝撃的な事実を知ったにもかかわらず、今まさに世界を動かすかもしれない重要な会談が雇主の仲介で進行されているので、雇主の判断力に全幅の信頼を寄せて、執事としての最善を尽くすことしかステーブンスの眼中にない。そして会議が終了した時、ステーブンスの胸中に執事としての地位に相応しい品格を持ち続けたという大きな勝利感が湧き上がってくる。しかし偉大な執事として相応しい品格を示すことができたという、このような大いなる達成感と同じ記憶の層には20年経っても忘れることができないミス・ケントンとの最後の重要な転機が存在するのだ。

老執事が思い出したのはその日カーディナルの到着を告げにミス・ケントンの部屋に出向いた時のことである。彼女はある人物と会うためその晩出かけることになっていたのだが、その人物に結婚を申し込まれていて返事に迷っていると、重大な個人的な情報を突然ステーブンスに告げる。そして、その相手は近々西部地方で新しい仕事に就くことになっているのだが、返事をどうしようか考えていると、さらに踏み込んで訴えかける。これに対してステーブンスは「さようですか(Indeed)」と個人的な感情を抑えて簡潔に答えるだけである。そして「では、今晩は楽しく過ごしてください(I do hope you have a pleasant evening.)」とそっけない言葉でその場面を終わりにしてしまうのだ。その夜遅く、依然として屋敷では会談が行われていたが、ミス・ケントンが外出から戻ってきた際のステーブンスとの会話を以下に引用する。

‘I trust you had a pleasant evening, Miss Kenton,’

She made no reply, so I said again,... ‘I trust you had a pleasant evening, Miss Kenton.’

‘I did, thank you, Mr Stevens.’

‘I’m pleased to hear that.’

‘Are you not in the least interested in what took place tonight between my acquaintance and I, Mr Stevens?’

‘I do not mean to be rude, Miss Kenton, but I really must return upstairs

without further delay. The fact is, events of a global significance are taking place in this house at this very moment.'

'When are they not, Mr Stevens? Very well, if you must be rushing off, I shall just tell you that I accepted my acquaintance's proposal.'

'I beg your pardon, Miss Kenton?'

'His proposal of marriage.'

'Ah, is that so, Miss Kenton? Than may I offer you my congratulations.'

(p.190) (下線筆者)

今晩会ってきた人物との間に何があったか興味がないのかと問われたスティーブンスは、世界的な重要性を持つ出来事が屋敷で進行しているので持ち場に戻らなければならないという言葉で答えを避け、更に彼女から早い時期に屋敷を去ることになるかもしれないと示唆されても、「できるだけ早くあなたの代わりが見つかるように最善を尽くしましょう。では私は二階に戻ります。(I will do my best to secure a replacement at the earliest opportunity. Now if you will excuse me, I must return upstairs. p.190)」とまるで関心がないかのような対応に終始するのだ。結局はこの冷淡なスティーブンスの態度がミス・ケントンの結婚と職を辞して屋敷を去ることの要因となったのだが、老執事の回顧によれば、スティーブンスにとって私的な重要な瞬間は全て執事として職務上重要な時に同時に発生している。あくまで老執事の曖昧で不確かな記憶のなかのことであるので、本当にそうであったのかどうかは定かでないし、時には自分を偽り、事実から目を背けることも記憶の世界では可能であろう。しかしこのように記憶のなかでは公的と私的な重要事柄が同時に派生しているということは、スティーブンスが個人的な感情を押さえつけてまでも執事としての職務に全てを賭けていたという事実を際立たせ、それは老執事の旅の終わりの、ある種の悟りの瞬間をより鮮烈なものにしているのだ。

DAY SIX – EVENING *Weymouth*

(6日目—ウエイマスにて)

几帳面なはずの老執事の回顧録はここでほぼ二日近くもの空白が生じている。4日目の午後のミス・ベンとの再会から海辺の街ウエイマスの夕暮れ時までの時間のことである。老執事は棧橋のベンチに腰を掛け海に沈んでいく夕日を眺めている。慣れないドライブに疲れのんびりと過ごしたいからというのが、この町に二晩泊る理由であると老執事は語るのだが、理由がそれだけでないことはまる二日の空白が雄弁に語っている。ここで老執事は二日前の午後のミス・ベンとの再会について思いを馳せるのだが、そこでやっと旅の目的が成就されたかどうか明らかになる。ふたりはホテルの喫茶室で再会を果たし二時間近く話し込むが、ここではダーリントン・ホールでの思い出話と、ダーリントン卿が戦争中と戦後に浴びせられた中傷に対して訴訟を起こしたが敗訴し、卿の名誉は永遠に汚されてしまったという事実が語られるだけで、老執事が確認したい事柄の核心には触れられない。その後バス停までフォードで送り、彼女が乗るバスが到着するまでの最後の僅かな時間のなかで、やっと老執事は意を決し、彼女がいま幸せかどうかと個人的な事情を問うことができる。これに対してミス・ベンはその質問の真意を悟り、以下のように現在と過去の心情を告白する。

'I suppose, Mr Stevens, you're asking whether or not I love my husband?...I didn't at first for a long time. When I left Darlington Hall all those years ago, I never realized I was really, truly leaving. I believe I thought of it as simply another ruse, Mr Stevens, to annoy you...For a long time, I was very unhappy, very unhappy indeed.

...And you get to thinking about a different life, a better life you might have had.

For instance, I get to thinking about a life I might have had with you, Mr Stevens...

After all, there's no turning back the clock now. (pp.207-8) (下線筆者)



ここでは老執事の問いかけの真意を悟ったミセス・ベンは率直に心の内を明かしている。ダーリントン・ホールを去ることにしたのは他に愛する人ができたからではなく、ただステーブンスを困らせるためであったこと、結婚した後でも、もしかすれば実現していたかもしれないステーブンスとの人生考えると、自分は大きな間違いを犯したのではないかと自分の決断を後悔する時があったことを認めているのだ。しかし同時に、現在自分のいるべき場所は夫のもとしかなく、結局は「時計を後戻りさせることはできない (there's no turning back the clock now)」という言葉で告白を終える。彼女の言葉が老執事に「心が張り裂けんばかりの痛み(my heart was breaking)」を与えたことを率直に認めているが、その痛み、喪失感が計り知れないものであったことが、まる二日間の空白の理由であることは語るまでもない。

ここまで時系列に沿って老執事の心の旅を辿ってきたが、イシグロが長編第3作目『日の名残り』の舞台としてイギリスの貴族の屋敷を設定し、語り手であり主人公として「執事」を登場させた意図に関してはいくつか推測できる。作家の出自と日本を舞台とした前2作の影響から、日本の精神を追求する日系のイギリス作家という固定したイメージを持たれることを避けたいというのもその理由のひとつであろう。この作品、あるいはこれ以降の作品を見れば、イシグロが関心を寄せているのは一見すれば特定の社会であるようだが、実のところ、もっと普遍的な世界であることがわかる。事実この作品で描かれているのは執事が登場する典型的なイギリス的世界であるのだが、さらに6年後に発表された長編第4作『充たされざる者』(*The Unconsoled*) ではこれまでのリアリズムの世界から真逆の非現実的な世界が描かれている。更に、イシグロが常に新しい試みを模索している作家であることは前作とは全く異なる世界を描いたことから容易に理解できるだろう。少し視点を変えて『日の名残り』へのアプローチに目を向けると、いくつかの選択肢がある。例えば、作品が書かれた1989年のイギリスの社会状況に注目すれば、経済の規制緩和、組合対策で疲弊した運輸、通信、水道、ガス、電気などの国営企業の民営化による商業主義のもとで、伝統的なイギリ

スが失われていく変動の時代であったことがわかる。EU加盟の前段階となるERM(European Exchange Rate Mechanism) 加入の是非を巡って揺れ動くなか、古き良きイギリスに思いを馳せ、イギリスはどこに向かうのかという問題提起として読み解くことも可能である。作品の冒頭の部分では、かつてイギリス貴族が所有していた屋敷は既にアメリカ人の所有となっているし、老執事が旅に使用する車はイギリスを代表するロールス・ロイスではなくアメリカ製のフォードというように、ダーリントン・ホールが象徴する古き良き時代のイギリスの秩序は崩壊し、既に変化を遂げているのだ。そして現在に目を向ければ、欧州連合体の一部としての立ち位置からEU離脱の道を選んだイギリスは再びイギリス独自のアイデンティティを取り戻していくのか、それともさらなる混迷を極めていくのか、今後の方向を問いかけられている現代と同じ状況であることは極めて興味深い。更に拙論の冒頭の引用部分、これは作品の最後の部分であるが、ここで老執事はアメリカ人雇主を喜ばせるため、執事の職務としてジョークの技術を磨き、ユーモアのセンスを身につけようと決心している。この解釈として、老執事の旅は失われてしまった自らのアイデンティティを取り戻し、新しいアイデンティティを探し求める旅であったのだと読み解くことも可能であろう。しかし、旅の途中で老執事が通るイギリスの田園地帯はほかのどの国にも匹敵するものがないほどの美しさ、風格を維持するものとして描かれているが、それは流転する時の中でも変わることのない良きイギリスの象徴としてよりはむしろ、老執事が生涯をかけて目指した「品格」の崇高さを表すものとして描かれている<sup>(7)</sup>。これに注目するならば、この作品の本質はいわゆるイギリスの現状小説というよりはむしろひとりの人間が人生の黄昏を迎え、自分の生きてきた人生の意義を問い直す、検証の旅路と捉えたほうがいいであろう。こうした観点から、拙論では旅の準備、始まりから終わりまで、その間の老執事の認識の変化を中心にここまで辿ってきたが、旅の時系列に沿って老執事の心情、認識の変化に注視しながら再確認をしてみよう。

まずプロローグで与えられる情報は、(1) 屋敷が既にアメリカ人の所有となっており、執事として今までのやり方ではうまく機能していないこと

(2) スティーブンスは執事としての最盛期を過ぎており、職務上の小さなミスが増えたという事実(3) ミスの理由は使用人不足のため職務計画に不備が生じたこと(4) 職務計画の不備を解消するには20年前に屋敷を去ったミス・ケントンの復帰が必要であり、その決心の後押しをしたのが彼女からの手紙であること(5) ミス・ケントンに面会するという旅の目的は職務上の観点からであり個人的なものではないこと、である。

自動車旅行1日目では(1) 偉大な執事には自らの地位に相応しい品格が必要であること(2) 執事の職には感情の抑制が効くイギリス人が相応しいとこと、が同じく執事であった父親のエピソードとイギリスの偉大な風景を引き合いにして語られる。

2日目の朝では(1) ミス・ケントンの結婚生活は破綻しかかっているの、ダーリントン・ホールに戻りたがっているのではないかという確信に近い印象を抱いていること(2) 1923年に屋敷で開催された重要な国際会議で、重篤の父親よりも会議を主催した雇主に仕えることを優先させたこと(3) この時が執事に必要な品格という特質を身につけるに至った執事人生の転機であったこと(4) ダーリントン卿についての芳しくない評判は虚偽であると確信していること。

2日目の午後では(1) 執事の職業的威信は雇主の価値で決まるので、偉大な執事は偉大な紳士に仕えることが必要であること(2) 旅の途中で村人たちにダーリントン卿に雇われたことがないと嘘をついたこと(3) ダーリントン卿は高德の紳士であり、長い間名家に雇われていたことに満足感を抱いていること。

3日目の朝では(1) ファラディのユーモア、ジョークに対して執事としてうまく対応できていない現状と十分に対応できるようになるまでジョークは封印しようという決心(2) ドイツ指導者たちの歓待を受け入れたのはダーリントン卿だけではないという弁明(3) ダーリントン卿は反ユダヤ主義でもファシストでもなかったが、ごく短期間ではあるが誤解を招くこともあったこと(4) ファラディに仕えた数か月の間に起こった失敗で執事としての自尊心が傷ついたこと(5) ミス・ケントンからの手紙の解釈に誤解があ

るのではないかという不安、である。

3日目の夜には（1）ダーリントン卿がユダヤ人使用人を解雇した事実（2）ミス・ケントンとの良好な関係の決定的な転機と後悔の念について（3）手紙に実際に書かれている以上の意味を読み込んでしまったという認識（4）ダーリントン卿の国際問題に関する見解の本質が愚かしいものであったという認識（5）信じる雇主に忠誠をつくした満足感と雇主の間違った判断については執事が責められるべきではないという弁明、が語られる。

4日目午後では（1）ミス・ケントンからの結婚の告知とそれに対する冷淡な対応（2）同時に屋敷で開催されていた重要な会議で、個人的な感情を押さえ、執事としての品格を保ち役割を果たしたという勝利感、が語られる。

6日目の夜は（1）名誉棄損の裁判でダーリントン卿が敗訴したことにより、卿の名誉が永遠に汚されたこと（2）当時のスティーブンスに対する想いについてのミス・ベンの告白ともう時間は戻せないという事実を認識したときの大きな喪失感（3）新しい雇主のもとで努力を重ねても力が残っていないので、以前のようなレベルのサービスができないという認識（4）ダーリントン卿のもとで価値あることを成し遂げていたと信じていたが、間違いであったという認識（5）価値があると思える雇主に運命を委ね尽くすことに誇りと満足を覚えるべきであること（6）雇主が望む任務としてジョークは不合理なものではないので、決意を新たにジョークの技術向上に取り組むこと、が語られている。

拙論では、計画を思いついてから旅に出た6日間にわたって老執事の心に去来する複雑で一貫性のない思いをここまで辿ってきた。執事を一人称の語り手としてストーリーを展開するという企てはそれまでの二つの長篇小説が日本を舞台としていたため彼の作品に特定のイメージを与える弊害を避けるためにも有効なものであったし、良きイギリスの伝統を象徴するものとしての執事の存在は最も適切なもののひとつであった。老執事が記憶の中に戻っていき過去の自分の生き方を語るという展開はまた、巧妙な手法でもある。自分についての語りはより客観的にもなれるし事実の隠蔽もまた可能であ

る。だが総じて記憶というものは曖昧なものであり、特に自分に関する記憶は不都合な部分は薄れ、都合のいい部分は誇張されて残る傾向がある。したがって老執事が物語る過去の記憶に上述したような曖昧な点、つじつまが合わない点が存在しても、その責めを語り手の老執事に負わすことはできない。そうではなく、つじつまが合わない点、曖昧なところは逆に意思が顕在化され、ステューブンスの心の起伏、揺れを探る良い手掛かりとなっていると言える。このようにして老執事の心に浮かぶ映像を辿ってくると、旅の本当の目的は執事としての職務上の理由にあったのではなく、ミス・ケントンに会うという個人的なことであったことが徐々に明らかになってくる。それは同時に自らの執事人生を振り返りその意義を問い直すことに繋がっていくのだが、老執事にとっては積み重ねてきた過ぎし栄光の日々に欠くことができない要素は、イギリス人貴族、世界を動かす重要な会議の場としての屋敷、執事をサポートするミス・ケントンなのである。しかし偉大だと信じていたダーリントン卿の偶像是崩壊し、「屋敷込みで売られた(part of the package)」老執事には、現在の雇主アメリカ人のもとでは今までのやり方が通用しない。屋敷で開催される華やかな会合も使用人の数も激減してしまった。過去を遡りこうした認識を新たにした老執事にとって、かつての輝きの僅かでも取り戻させてくれる存在として、希望の光をミス・ケントンに希求したのも全く当然のことであろう。

旅を続け過去を回想するにつれてダーリントン卿に対する評価、ミス・ケントンに対する想いが明らかになってくるのだが、老執事が20年あまり前の自分の気持ちを語るとき、それが純粋に当時の感情なのかそれとも当時は気づいていなかったが後になって気づいたより真実に近い感情なのか、曖昧で判断しがたいところがある。回想の場面で語られる内容は老執事の心境なのか、或は当時のステューブンスの心境なのかその境界が曖昧なものが散見されるのだ。これは一見妙なことに思われる。つまり語っている老執事は既にすべてを経験し事実も全て認識しているのだから、語りには一貫性があるのが妥当であろう。しかしながらこうした矛盾は、記憶が曖昧なためとして時には事実を目を背け、自分を偽りながら、次第に自分の人生の意味を検証し

ていく執事の苦悩の姿を逆に鮮やかなものとして浮かび上がらせる効果があるのだ。自らの感情を無視し、背を向けて逃げてきたという認識、それは間違いであったこと。自身の価値を高めてくれる雇主のために捧げてきた執事人生であったが、信じていた存在に価値がなかったと認識せざるを得なくなった時の痛切な敗北感が強調されているのだ。

実のところ、作品の冒頭で既に老執事はかつての輝きを失っている。執事としての自信も揺らいでいる。旅を始めるにあたって、失った輝きを少しでも取り戻せるのではという淡い期待があり、それを充足させるにはミス・ケントンが重要なピースであることは述べてきた。と同時に自分が執事としていかに優れていたかを確認することも必要であった。それは自分の人生を肯定してくれるものであり、再び尊厳を取り戻させてくれるはずのものであった。しかし偉大な執事とは何かを語り、その定義を再確認していくうちに、それは脆くも崩れ去っていく。偉大な執事に必要な「品格」は仕える雇主により決定されると認識していた執事にとっては、間違った判断を下した雇主に仕えたことは優れた執事に不可欠の「品格」も存在しないということになるからだ。老執事が最後に得た認識はこうした喪失感なのである。

この旅は老執事にとって人生の価値が、自らが求めたものではないと認識する旅であった。唯一の希望の光と思えたミス・ケントンとの再会さえも、執事としての職務を優先させるために私情を抑え込んだという、過去の自分の間違いを思い知らされるものでしかなかった。自分の雇主が崇高な存在ではなかったこと、従ってそこに自らの品格のよりどころを求めた生き方が間違いであったこと、執事としての高みを極める為に感情を押し殺してミス・ケントンを受け入れようとしなかったこと、そのすべてが間違いであったという自責の念を旅の終わりに悟る瞬間が訪れたのだ。

拙論の冒頭に再度戻ろう。「夕方が人生で一番いい時間だ」という棧橋であった老人の言葉で少しばかり気を取り直した老執事は、作品の最後で今の雇主ファラディを喜ばせるために、今までうまくできなかったジョークの技術を磨こうと決意する。確かにこれは旅の終わりに老執事が新たなアイデンティティを獲得し、残りの執事の道を穏やかに進んでいくとの解釈も可能で

あろう。だが果してそうであろうか、老執事には日の名残りの優しい時間が待ち受けているのであろうか。過去の決定的な場面、即ちミス・ケントンから結婚の話聞いた場面、そして今ミセス・ベンから過去の心情を打ち明けられたがもう後戻りはできないと告げられた傷心の場面、それらの場面で何故かスティーブンスは不釣り合いな「笑い」を浮かべているのだが、それらは執事としての職務意識として真の感情を隠すためのものであって、心から浮かび出る笑いではない。実際はその逆で、こうした「笑い」は彼の心の中の絶望を表現する悲しい「笑い」なのである。老執事に最後に訪れたのは、ミス・ケントンへの愛、執事としての品格、かつての輝かしい日々、それらは全て叶わぬ夢だという悟りの瞬間なのである。沈みゆく黄昏の穏やかな薄明りの中で、もはや残っていない力を振り絞ってジョークを身につけ、主人を喜ばせようと決心する老執事の姿には新たな希望の兆しは見られない。そこにあるのは、ただ悲しみ、喪失感だけなのである。失ったものは計り知れないのだ。その姿には悲壮感さえ漂っている。この旅は失ったもの、目を背けていた事実、それらを認識する旅でもあった。旅の初めに老執事が求めていたものの実態が明らかになっていき、旅の最後の悟りの瞬間に導かれていく。こうした姿を主君を失った忠実な武士（浪人）と捉える批評家もいるのだが<sup>8)</sup>、しかしスティーブンスの失敗は彼だけに特別なことではない。誰も自分に与えられた能力を抛り所にして、より高みへと導いてくれると信じるものに賭けて日々を生きてゆかなくてはならない。いくつかの転換期を経験し、それが果たして人生を賭けるに相応しいものであったのかという問いかけには、棧橋のベンチに座る老執事と同様に人生の夕暮れ時の薄明りのなかで答えが告げられるのだ。この作品でイシグロは、「執事」というまさにイギリス的な道具を用いながらも、実はイギリス社会の枠を飛び越えて、人生の黄昏時に過ぎ去りし日々を振り返った時、そこに自らの存在意義を見出すことができない人間の悲哀、喪失感という普遍的な世界を描いたといえよう。



## Notes:

1. Ishiguro, Kazuo, *The Remains of the Day* (Everyman's Library, 2012), p.213.  
以下作品からの引用文は全てこの版のものであり、頁数のみ示す。
2. 作品の和文訳は、土屋政雄訳『日の名残り』（早川書房）を参考にした。
3. Lewis, Barry, *Kazuo Ishiguro* (Manchester University Press, 2000), p.74で以下のよう  
に指摘している。As island nations, they have both been insulated from many  
of the foreign influences and invasions that have adulterated countries on the  
mainlands of Asia and Europe.  
またMatthew Beedhamは*The Novels of Kazuo Ishiguro*で以下のよう  
に指摘している。  
Other critics, however, clearly wanted Ishiguro to write about Japan. Annan, who  
sees *Remains* as more naïve and more flawed than the first two novels, describes  
Stevens as having a 'Japanese soul'.
4. ウッドハウスに登場するジープスは執事として描かれたなかでもっとも有名である  
が、執事ジープスはスティーブンスと異なり、主人よりはるかに豊富な知識を  
持っていて主人の窮地を救う。
5. 文芸批評家のジョン・サザーランド(John Sutherland)は『ヒースクリフは殺人犯  
か?』『ジェイン・エアは幸せになれるか?』に続く『現代小説38の謎『ユリ  
シーズ』から『ロリータ』まで』（川口喬一訳、みすず書房、1999年）のなか  
で『日の名残り』におけるスエズ戦争への言及が欠落していることを指摘してい  
る。実際作品中ではガス欠の為やむを得ず泊めてもらったモスクムの村人の口か  
らスエズ動乱の責任者であるイーデンの名前がただ一度発せられているだけであ  
る。
6. 「信頼のおけない語り手」(unreliable narrator) はWayne C. Boothが *The Rhetoric  
of Fiction*, 1961. で用いた用語だが、David Lodgeが*The Art of Fiction*, 1992.で*The  
Remains of the Day*の語り手に言及してから頻繁に使用されるようになった。
7. 『日の名残り』は1993年にジェームス・アイボリー監督により、スティーブンス  
をアンソニー・ホプキンス、ミス・ケントンをエマ・トンプソンで映画化され  
た。ここではイギリスの美しい田園風景は特に描かれておらず、ミス・ケント  
ンの結婚相手は元執事に原作からは変更されているなど、スティーブンスとミス・  
ケントンの関係をフィーチャーしたものとして描かれている。また、旅に使用す  
る車は国産車という設定である。
8. Hermione Lee too cannot read the novel without connecting it to Japan.... She  
mentions that the novel is really a Japanese novel in disguise, that Stevens is a  
kind of *ronin* or faithful servant left without a master. Anstony Thwaite also  
reads Stevens as a ronin: 'the masterless retainer who is still tied by firm bands  
to the master.

## 参考文献

- 村上リコ 『英国執事』 貴族をささえる執事の素顔、（河出書房新社）2019  
 田中亮三 『英国貴族の暮らし』（河出書房新社）2009  
 新井潤美 『執事とメイドの裏表』（白水社）2012  
 『カズオ・イシグロの世界』ユリイカ12月号（青土社）2017  
 『カズオ・イシグロの世界』（水声社）2017



- Beedham, Matthew. *The Novels of Kazuo Ishiguro*. Palgrave Macmillan, 2010.
- Lewis, Barry. *Kazuo Ishiguro*. Manchester UP, 2000.
- Mason, Gregory. 'An Interview with Kazuo Ishiguro' *Contemporary Literature*, 1989.
- Parkers, Adam, *Kazuo Ishiguro's The Remains of the Day*. New York and London, 2001.
- Shaffer, Brian W. *Understanding Kazuo Ishiguro*, Columbia S.C. 1998.
- Allan Vorda and Kim Herzinger, "An Interview with Kazuo Ishiguro," 1990.
- Bradbury, Malcolm. *The Modern British Novel*. Penguin Books, 1993.